

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-73

学校名・団体名	伊賀市立柘植小学校
HPアドレス	http://www.iga.ed.jp/tsuge-e/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	「おもてなし」体験を通して「連帯」「協働」を教える
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>子どもたちがさまざまな「おもてなし」体験をくぐる中で、他者との関わり方、他者への働きかけ方を学ぶとともに、主体的に取り組む中で、達成感を味わい自尊感情を高める。1年間の学習活動を通して「連帯」や「協働」することの意味や意義を理解させ、子どもたちに、より積極的な生き方を身につけさせていく。</p>	

<活動・研究報告>

1. はじめに

本校は農村地帯にある小規模校で、児童は純朴で素直ではあるが、消極的で、特に他人と交わったり、自ら他者に働きかけたりする力が弱い。また校区に被差別の地区があり、家庭状況の厳しさが社会体験の少なさや学力格差として現れている。長年、なかまづくりを中心にして、自尊感情を育む人権同和教育や、高学年での職場体験学習などのキャリア教育の取り組みにより、児童をエンパワメントさせ、将来展望をもたせることで、学力にも一定の改善がみられている。

しかし、これまでは特に教師主導の行事や体験活動が主で、児童の自発性によるものは少なかった。昨年度3月に改選された児童会の役員は、「学校も地域の人もみんなが笑顔になれるイベントをやりたい」と公約し、6年生全員が賛同する気持ちを表明した。この気持ちを活かし、苦労しながら、地域の人々やお世話になっている人々に呼びかけ、あるいは協力を働きかけ、イベントを成功させていきたい。その過程で、またその後も1年間の学習活動を通して、「おもてなし」に必要なこと、「連帯」や「協働」の意味を学ばせていきたいと考えた。

2. 柘植小学校にここフェスタ2015

(1) 実行委員会の立ち上げ・協力の依頼

児童会役員(企画委員)の子どもたちのイメージは「にぎやかで楽しい夏祭り」であったが、校長は「自分たちでやりきること」「いろいろな人を招待すること」と、「学校でやるからには学びの場面を入れること」という条件をつけた。企画委員にとどまらず、6年生全員で企画書づくりから始めた。「どのような学びを入れるのか」「誰にどのように呼びかけるのか」「どんな働きかけをしていくのか」など、さまざまなことを考えさせた。そして、教育ボランティアのみなさん、「まちづくり協議会」のみなさん、「いがまち人権センター」の職員さん、「社会福祉協議会」の方々、そして保護者PTA(育友会)に協力依頼をすることになった。直接児童が足を運び、また電話で依頼して、6月に第1回の「実行委員会」を開催することになった。

(2) 夜の実行委員会に全員参加

夜に「実行委員会」を開催した。司会進行を企画委員が行った。意義・目的・趣旨・テーマを自分たちでプレゼンした。出席者からは、「参加者全員が参加できるような配慮をしているか」「プログラムの時間配分に余裕はあるか」「ごみの始末の計画は?」「安全への配慮は?」「校内の案内表示は?」など、厳しい質問が投げかけられた。(教職員から、諸団体の方々に、不備な点を指摘していただくよう、根回しをしてあった。)企画委員で応答できないとき、「ちょっと待って下さい」と、部屋の後方に陣取った他の児童たちと真剣に相談する姿が見られた。結論が出ない課題は、7月に予定した第2回の実行委員会に再提案することになった。最初の会議は夜遅くまでかかったが、結局15人全員が最後まで参加していた。

第2回の実行委員会までの「総合学習」は、真剣そのもので、「おもてなし」がどれだけ大変なことか、さまざまな気配りが必要なこと、自主性、主体性や積極性が必要なことなどを、体験的に学んでいった。

(3) 資金が足りない

資金集めのために、全校に呼び掛けて古紙回収・アルミ缶回収に積極的に取り組んだが、それでも足りないことが見えてきた。そこで、保護者だけでなく地域にも呼び掛けて「余り物バザー」をすることになった。7月の参観日に向けて、チラシづくりから会場設営、当日の売り子・会計も子どもたちが主体的に行った。また、獲得の見込がうすくても、賞金が出る作品コンクールに積極的に応募した。「学校賞」の出る「親子クッキングコンテスト」には、全親子が応募していった。

(4) 「おもてなし」に必要なこと

実行委員会では指摘された「お年寄りや手足の不自由な方をどうお迎えしたり案内したりするのか」「小さい子が迷子になったら?」「各ブースでトラブルが起こったらどうするのか?」など、具体的な場面を想定して話し合いがもたれた。子どもたちは、「一人でもつまらなそうな顔をしていたり、消極的な態度だったら、来てくれた人を不愉快にさせてしまう」「笑顔が一番大切」「自分から困っている人に話しかけたり声をかけていく」など、「おもてなし」に必要なことを見つけ出していった。

(5) 深まった絆

当日は、体育館と校舎内で、「遊び」と「学び・体験」をテーマに14のブースを設置。6年生と教育ボランティアさんは、魚釣りゲームや射的、スーパーボールすくい、昔遊びなど多彩な「遊び」のブースの運営に携わった。他の協力団体は防災・人権・平和などの「学び・体験」ブース、飲食ブースを担当していただいた。

柘植小学校
にここフェス
児童が住民招き夏祭り

6年生が企画地域と協力

伊賀市柘植小学校(川口)の6年生児童が、校区内の住民招きの夏祭り「にここフェス」を企画して、夏休み期間中に開催することを発表している。児童らは、地域の人々やお世話になっている人々に呼びかけ、あるいは協力を働きかけ、イベントを成功させていきたい。その過程で、またその後も1年間の学習活動を通して、「おもてなし」に必要なこと、「連帯」や「協働」の意味を学ばせていきたいと考えた。

▲にここフェスタの打ち合わせをする児童ら(伊賀市で)

深まった地域との絆

伊賀市柘植小学校(川口)の6年生児童が、校区内の住民招きの夏祭り「にここフェス」を企画して、夏休み期間中に開催することを発表している。児童らは、地域の人々やお世話になっている人々に呼びかけ、あるいは協力を働きかけ、イベントを成功させていきたい。その過程で、またその後も1年間の学習活動を通して、「おもてなし」に必要なこと、「連帯」や「協働」の意味を学ばせていきたいと考えた。

当日の売り子・会計も子どもたちが主体的に行った。また、獲得の見込がうすくても、賞金が出る作品コンクールに積極的に応募した。「学校賞」の出る「親子クッキングコンテスト」には、全親子が応募していった。

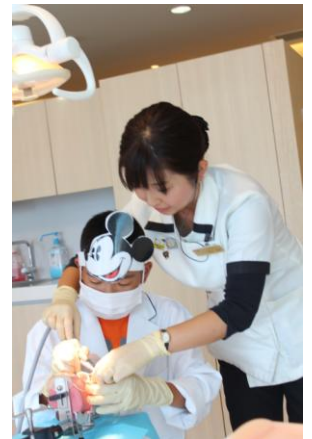
たとえば、社会福祉協議会さんには車いす体験やアイマスク体験、まちづくり協議会さんには「斎王群行の斎王さんになる」体験をしていただいた。メイン会場の体育館では、柘植の都美恵太鼓によるオープニングイベントに始まり、教職員もメンバーの一人として参加しているフラダンス、ヒップホップ、エイサーのグループのステージショーを繰り広げた。

企画委員の児童は、「イベントを通じて柘植の人々が交流し、地域の活性化につながったと思う」「地域の人々が参加する大きなイベントが開けるか心配だったが、たくさんの人と協力する中で絆が深まったように思う」と感想を述べた。事後、6年生児童が協力団体に宛てて書いた礼状には、次のようなことが書かれていた。「つねに笑顔で、お客さんをまきこんで自分が楽しそうにしていることで、お客さんも笑顔になっていく」「大きな事をなしとげるためには、細かいことをおこたらずにしていかなければいけないと思った」「たくさんのお意見を出して下さった綿密な会議のおかげで、こちらもお意見を出せた。これからの目標が決まった。それは、あたりまえのことをあたりまえのように、一生懸命するということです」

3. 修学旅行での「おもてなし企業」体感

修学旅行で東大阪市にある「ヨリタ歯科クリニック」を訪れた。「行列ができる歯医者西日本一位」になったり、経済産業省の「おもてなし企業百選」に選ばれている企業である。

10月20日午後、訪れた16名の6年生をハイタッチで迎えてくれた30名ほどのスタッフの皆さんは、「歓迎の歌を歌います」と言って、柘植小の校歌を歌ってくれた。ミーティングルームでは、歯にまつわるクイズで盛り上げてくれた。次に班ごとに本物の歯科専用の椅子と道具で歯垢除去の体験や、型取り体験、詰め物体験などをローテーションでさせていただいた。笑顔いっぱい、やさしくアドバイスしてくれるスタッフのみなさんに、児童は目を輝かせていた。最後に、院長の寄田先生から、「おもてなしは、対等な関係で、見返りを求めない心のこと。うちのライバルはディズニーランドです」と講話をいただいた。帰り際にはスタッフから児童一人ひとりに宛てたメッセージカードをいただいた。児童はここで、プロ集団によるほんものの「おもてなし」を体感し、チームとして連帯し、協働しながら生き甲斐をもって働く姿を学び取った。



4. 「いじめや差別をなくすために必要なこと」の学習

ヒューリアみえ（反差別人権研究所三重）の松村さんと中村さんに、人権総合学習で、「いじめや差別をなくすために必要なこと」を聞き取り学習した。講師さんたちは、自分が「いじめや差別をしない」だけでなく、人に直接働きかけたり、人とつながったり、協力していかなければ「いじめや差別をなくせない」と、「連帯」すること、「協働」することを訴えられた。

5. 「心の輪を広げよう」の発表

学習発表会である「柘植小フェスティバル」で、半年間学んだことを劇化し発表していった。「心の輪を広げよう～にこフェスを通してつながる絆」と題して演じた劇のフィナーレのセリフは次のようになった。

「2学期に水平社運動のことを学び、一人の青年の思いが広がったことを知った。わたしたちもにこフェスで一人が声を上げることで仲間が動き、周りが動き大きな渦になった。私たちも社会を変えていけると実感した。一人ひとりの思いを、100%の自分を伝えることで、絆を深めることができることができました」

6. 「新春全校カルタ大会」の工夫

一年間の学びを活かして、地域の人々や日頃お世話になっている教育ボランティアさんを招待し、「おもてなし」する中で、1月16日に、「新春大カルタ大会」を開催した。運営方法は6年生が企画した。

全校の全員が一度は参加できるよう、寒い体育館の中で動き回って暖を取りながら遊べるよう、体育館いっぱい放射状に並んで1回戦が行われ、教室に移動して行った2回戦では、低学年も楽しんで取れるよう、競技方法に工夫が凝らされていた。またヒートアップした下級生を上手になだめる6年生の姿があちこちで見られた。

7. おわりに

子どもたちは、さまざまな「おもてなし」体験をくぐる中で、他者との関わり方、他者への働きかけ方を学んでいった。様々な課題に対して自主的・主体的に取り組むことで、「連帯」や「協働」することの意味や意義を五感を通して理解していったのではないかと考える。また、一人ひとりの児童が達成感を味わい、自信をもち、自尊感情を高めることができたと思う。これらの流れを大事にして後輩達にも経験させていきたい。